

トイレトペーパー協奏曲

関西大学 社会安全学部 小澤 守

昨今のコロナウイルスによる肺炎蔓延は、中国武漢由来かどうか、最終的な調査結果など出ていないし、本稿を執筆している時点で、日本で今後どのように展開するのか、いまだ見えていないが、世間では妙な憶測からかなり深刻な風評被害が発生している。

先ごろ内閣は全国の小中高校の一斉休業を求め、巷では子供たちが1か月の長期休暇に入ってしまった。電車の中ではマスクをした乗客がほとんどで、マスクをしていないひとには、なにか白い目で見られるような雰囲気さえある。それならばマスクを買うかとスーパーやドラッグストアに出向けば、マスクが全くなく、店員に尋ねてもいつ入荷するか全くわからないという。

マスクさえしていれば安全などというのはおかしな話で、ウイルスがマスクだけで防げるはずもない。最も重要なのは飛沫感染を避けることであり、マスクもその一つにすぎないのである。電車に乗れば、車内アナウンスで駅の前で列車が左右に揺れるため、手すり、つり革につかまるように、またエスカレーターに乗るときにはサイドベルトにつかまってという。一方、感染予防では手すり、つり革などに触らないのが望ましいのであって、両者のバランスをとるには、きちんと手を洗う、できればアルコールなどで除菌をすることが効果的である。しかしよく考えると、子供のころから、外から帰ったらうがいと手洗いと教えてもらっていたはず。つまりは本来気を付けるべきことを着実にやりましょうということに他ならない。

さて、マスクはまだいい、致命的なのはトイレトペーパーである。これがスーパーやドラッグストアの棚から忽然と消えてしまっているのである。誰かがSNSで流したデマのせいなのか、TV放送でトイレトペーパーが棚から消えていると放送したことによってかえって風評が広まったのか、定かなことは分からないが、ともかく近所の店から本当に忽然と消えてしまっている。そもそも日本の人口に合わせて市場規模が決まり、それに合わせて継続的に生産しておれば、トイレトペーパーが市場から消えることはないはずである。コロナウイルスが蔓延するからといってトイレに行く回数が急激に増えるはずもないのに。

今を去る47年前、つまりオイルショックの時にも、一般市民にとって深刻であったのはオイル価格が上昇するよりも、トイレトペーパーが市場から消えることであった。著者などは下宿屋のおばちゃんから、極力大学で用足しをするようにと言われたものである。我が国のトイレはかつては汲取り式が多く、町ではバキュームカーで定期的に汲みだしていた。著者の実家などもその類で、かわいそうなお尻は新聞紙でこすられて、落下距離が短いと、液面からしずくが跳ね上がってきて、おつりなどと称していたものである。田舎では定期的に肥汲みをして野菜畑に肥料としてまいていた。著者などはその野菜を食べていたせいか、回虫がおなかのなかでよく育って、調子が悪くなると、虫下し薬のマクリを家庭でも学校でも飲まされた。これのまづいことこの上なく、同じ容器を使って次には脱脂粉乳を飲まされた

ときのまずいことこの上もなかった。マクリで駆除された回虫と卵は便所で排出され、下肥として再び畑に戻ってくる、いわゆる循環型社会が形成されていたのである。

衛生状態の改善として水洗便所が全国的に広がり、旧来の汲取り式のトイレが著者の田舎でさえ消えてしまった。それとともに水に接触すると繊維の結合が取れてばらばらになり、流動性が高まるトイレットペーパーを使わなければ流れが閉塞して大変なことになる。停電などすれば、トイレの水も流せなくなるし、今回のような風評が蔓延すると容易に危機的な状況が出現することになる。つまり現在の我が国では、トイレットペーパーに生活の根幹を握られていると言わざるをえない。そういえば25年前の大震災では下水管が破壊し、しばらくの間、公園に置かれた仮設トイレを使わなければならない状態にあった。

結局のところ、今回のトイレットペーパー騒ぎはまるで47年前と同じであり、この間、日本人は何を学んできたのだろう。すこしでも冷静に対処することが、結果的に社会そして経済におかしなインパクトを与えず、コロナウイルス対応がスムーズに実施できることに繋がるように思うのだが、いかがか。

